

郷土網干の歴史をもっと知りたいとの思いから、あぼしまち交流館の（歴史講座）に入会した。そこで出会った古文書資料「備忘録」は、明治末期から大正・昭和初期にかけて惣代が書き継いだもので人々の生活の様子が垣間見える。

そんな綴りのひとこまの記事が目止まる。「明治41年6月13日・学務委員報酬金参円を網干小学校の基本財産に寄付」惣代石田氏の記録である。寄付の言葉で曾祖父を思い出した。子供のころ母が「曾祖父は人の事を考え、苦しい中でも寄付をしたんや。そやから、大きなお墓を建ててもろたんやで」と話してくれたことがある。そこで村の関係者や親戚に聞いてみた。明治13年生まれの曾祖父（長久辰治）は、体格が良く正義感が強かったのに、目が悪く兵隊検査に不合格。戦場に行けぬ我が身を恥じ、必死で消防団の活動をし、その報酬をみな学校に寄付した。その行為を義人と讃えて友人達が昭和15年垣内万福寺に墓を建立した、昭和18年に亡くなる3年前である。ひよんな事から曾祖父の人生が想像できたのは、貴重な発見であり喜びである。苦しいとき曾祖父の墓の前で手を合わすと「勉強しろ、広い世界を見よ」と曾祖父の声が聴こえるような気がし、勇気をもたらってきた。

歴史講座会員

大脇和代